

ルカによる福音書17章「神の恵みへの応答」

1A 神の賜物としての信仰 1-10

1B 躓きへの対処 1-5

2B 命令に従う僕 6-10

2A らい病の癒しに対する応答 11-19

3A 人の子の日 20-37

1B 只中にある神の国 20-21

2B 人の子の来臨 22-37

1C 稲妻の光 22-25

2C ノアとロトの日 26-37

本文

ルカによる福音書 17 章を開いてください。前回、私たちはイエス様が不正の管理人の喩えを語られて、それからそのような富に対しても、きちんと御国のために賢く用いていくことを語られました。そういった話を蔑んで聞いていたパリサイ人がいまして、彼はそういったこととは無縁だとしながら、実は心の中では金を愛していました。それを拡大鏡で見せるがごとく、イエス様は金持ちとラザロの話をされたのです。そこには、貧しいラザロを省みることなく、贅沢な暮らしをしていた金持ちが、陰府の中で苦しみ、けれどもラザロはアブラハムの懷で慰めを受けていました。このように、信仰を持っていたラザロは慰めを受け、金持ちは苦しみを受けていました。

そしてアブラハムが、金持ちに言った言葉が大事でした。それは、ラザロを生き返らせて、家族に警告してほしいということです。けれども、アブラハムは、「モーセと預言者があるではないか。ラザロが生き返っても、モーセと預言者に耳を傾けないなら、彼らは聞き入れはしない。」ということなのです。どういうことか？パリサイ人が、結局、律法と預言者を重んじていると言いながら、金に対する欲について何も力を持っていなかったことを表しています。律法ではなく、律法に関わる人の教えを重んじていたので、律法そのものにある心というか精神をないがしろにしていました。見た目には、よく見えますが、内側が放縦や欲で一杯になるというものです。

1A 神の賜物としての信仰 1-10

そこでイエス様は、弟子たちに向って語り始められます。それは、「つまずき」についてでした。そして、次にイエス様は信仰について語られます。そして僕の態度について話されます。それから、十人のらい病人の話に移ります。一見、ばらばらの話がつながられているように見えますが、実はつながっています。そのつながっている流れを追って行ってみましょう。

1B 躓きへの対処 1-4

1 イエスは弟子たちに言われた。「つまずきが起こるのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわざいす。2 その者にとっては、これらの小さい者たちの一人をつまずかせるより、ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがましです。3a あなたがたは、自分自身に気をつけなさい。

イエス様は、パリサイ人に対して語られて、彼らが人々をつまずかせていることを考えておられたことと思います。躓きとは、元々の意味は動物を捕らえる時に使う「罨」ですが、人々に罪を犯させること。また誤りを信じさせ、滅びへと向かわせること。真理であられるイエス様から遠ざけることを意味します。イエス様が、「マタ 23:14 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。」と言われましたが、まさにこのことです。パリサイ人は自分自身も神の国に入らないようにしています、自分につまずきをもたらしています。そして、その知識によって他の人々も神の国に入らないようにさせています。つまり、つまずかせているのです。

イエス様は、「つまずきが起こるのは避けられませんが」と言われましたが、二つの意味が含まれていると思います。それは、イエス様ご自身につまずく人たちがいるということです。主が語られたことで、かえって神に反抗し、自らを罪に定め、自分自身に滅びを招いてしまいます。パウロは、イスラエルが、「ロマ 9:31 信仰によってではなく、行いによるかのように(義を)追い求めたからです。彼らはつまずきの石につまずいたのです。」とありますね。イエス様の言葉、またその十字架によって、間違った動機で求めていた人たちが、かえって神から離れていってしまうことがあります。これは、避けられないことです。

そして、イエス様が、「つまずきが起こるのは避けられませんが」と言われたのは、弟子たちの間であっても、つまずきを完全に回避できないということもあります。それは、罪や過ちをキリストについて行くと決心した者たちの間でも持っているからです。マタイ 13 章の天の御国の奥義の譬えで、悪魔が畑に種を蒔き、毒麦が出て来てしまいました。僕たちは、「私たちが行って毒麦を抜き集めましょうか。」と尋ねたところ、主人は、「いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。」と言いました(マタイ 13:28-30)。収穫とは、終わりの日の時、主が帰って来られる時です。それまでは、主は毒麦と良い麦が混在している状態を許容しておられるということです。教会がなぜ、こうも過ちや罪が多いのだろうと嘆息されるのであれば、それは、「はい、イエス様がそうされているからです。」ということができます！完璧な教会などないのです、あったら、最もヤバイ教会です。イエス様が無いとされているのに、あると言っているのですから、偽善の罪を犯しています。ですから、つまずきが起こるのは避けられないと言われます。

しかし、自分自身は気を付けて、つまずかせることのないようにしなさいと強く戒めておられます。ここでの「ひき臼」は、女が回すようなひき臼ではなく、馬が回すようなものです。今、ガリラヤ湖の湖畔には、その石がまだ残っていて展示されていますが、かなり大きいです！それを首に結びつけられて、海に沈められたら、一たまりもありません。海の底には陰府があるとされますが(ヨナ書参照)、まさに、金持ちが落ちたハデスの苦しみの場所のことを指し示しています。

イエス様がどれほど、人を救いたいのかその情熱をここで感じるすることができます。主が 99 匹を置いて、一匹を救おうとされる時に、そこで邪魔になるようなものは、極力取り除くということを表しています。それは、まず自分自身が罪から離れるということです。そして、自分自身は罪だとは思っていないけれども、信仰によって許容されていることでも、他の弱い兄弟が罪を犯したり、信仰から離れたりするようなものがあるならば、それは取り除かないといけません。「ロマ 14:13 こういうわけで、私たちはもう互いにさばき合わないにしましょう。いや、むしろ、兄弟に対して妨げになるもの、つまずきになるものを置くことはしないと決心しなさい。」

とはいっても、やはり、つまずきは避けられないと主は言われましたね。ですから、次の赦しの教えが必要になるのです。

3b 兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして悔い改めるなら、赦しなさい。4 一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたのところに来て『悔い改めます』と言うなら、赦しなさい。」

ここで大事なものは、「兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい」ということです。レビ記において、「自分自身のように隣人を愛しなさい」という教え、イエス様が教えられたことですが、そこを見るとこう書いてあります。「19:17-18 心の中で自分の兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならない。そうすれば、彼のゆえに罪責を負うことはない。あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。」恨んではならない、憎んではならない、よく戒めなければならない、としています。そして、自分自身のように隣人を愛しなさいとあるのです。つまり、誰かが自分に罪を犯したら、本人にそのことを言わないといけません。日本では、言わないことが美德とされています。けれども、それは偽善であり、心に留めて恨み、憎んでいるなら、それが今度は自分にとっての罪となるのです。そして、イエス様は、罪の赦しは一日に、七度、罪を犯されても、それでも赦しなさい、つまり完全なものにしなさいと言われていています。

ですから、つまずかせることも災いですが、つまずいたと言って、恨んだり、憎んだりすることも、主の前では許されないことです。つまずきは避けられない、けれども自分自身に気を付ける。けれども、罪を誰かが犯したら、戒め、そして赦す、ということです。

2B 命令に従う僕 5-10

5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増し加えてください。」6 すると主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この桑の木に『根元から抜かれて、海の中に植われ』と言うなら、あなたがたに従います。

ここから、とても興味深い話が始まります。使徒たちの意味する「信仰」と、イエス様が語られる信仰の意味が違うことです。使徒たちは、驚きました。七度も赦すなんて、到底できないと思いました。それで、そのようなことできるように信仰を増し加えてください、と言っています。このように感じることは良くあるのではないのでしょうか？

けれども、そうではないのです。芥子種のような信仰であれば、桑の木にこのように命じることができると言われるのです。芥子種は、肉眼で見たら、粉末の一粒のような小さいものです。つまり、使徒たちは、自分たちの内に信心深さが積み上げられなければいけないと思っていました。けれども、実は、信仰さえが神から与えられるものであり、私たちがしなければいけないのは、神から与えられた賜物を用いる、つまり言われたことに従うことです。そうすれば、その通りに必ずなるということです。使徒ペテロが、38年足なえの男を立たせた時に、「使徒 3:16 このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このとおりに完全なからだにしたのです。」と言いました。イエスによって与えられる賜物です。そしてコリント第一 12章 9節に、「信仰の賜物」があります。信仰でさえ、神に与えられるのです。ですから、私たちは、「できるか、できないか。」という世界に生きているのではなく、「従うか、従わないか。」の世界に生きているのです。

7 あなたがたのだれかのところに、畑を耕すか羊を飼うしもべがいて、そのしもべが野から帰って来たら、『さあ、こちらに来て、食事をしなさい』と言うのでしょうか。8 むしろ、『私の夕食の用意をし、私が食べたり飲んだりする間、帯を締めて給仕しなさい。おまえはその後で食べたり飲んだりしなさい』と言うのではないのでしょうか。9 しもべが命じられたことをしたからといって、主人はそのしもべに感謝するのでしょうか。10 同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

主人としもべの関係から、信仰の従順についてイエス様は教えておられます。もし仮に、先ほど使徒たちが自分の信仰を増し加えさせてくださいというのなら、それは自分の信心深さが人の罪を一日に七度、赦すことができたということになります。そうすると、それは僕であるはずの自分が、主人と同じ食事の席で食べるような報酬を求めることになります。しかし、それは信仰によるものではありません。「ロマ 4:4 働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。」しかしイエス様はここで、使徒たちが主の命じられることを、そのまま素直に、「はい、従います」と僕の姿勢を貫くなら、その時にそれに従うことのできる信仰が与えられ、

また従うことのできる力も与えられる、ということです。

モーセのことを思い出してください、杖を地に投げなさいと命じられて、その言われることをただ信じて従ったら、杖が蛇になりました。そういったことです。信仰とは、神の命令されたことを、自分ができるかできないかということ度を外視して、そのまま従うことであり、その時に神は必ず、ご自身の力を現してくださるということです。

2A らい病の癒しに対する応答 11-19

11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。12 ある村に入ると、ツアラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。

イエス様の旅は、すでにユダヤ地方に近づいています。けれども、ここで再びサマリアとガリラヤの境を通られた、と言われます。もしかしたら、ペレアとサマリアの境のことを言っているのかもしれませんが。ペレアも大まかにガリラヤ地方の一部に入れることもあるからです。成田空港を、東京国際空港と呼ぶような感じですね。ここで、このことがとても大切になります。サマリア人がこのらい病人の中に含まれるからです。ちなみに、ツアラアトはヘブル語で、らい病という意味です。

そして「遠く離れ」て叫んでいます。これは、彼らは自分たちが汚れているので、触れると他の者たちが汚れるとみなされていたからです。すごいのは、そのような距離があるのに、イエス様が、「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」と言われただけで、その言葉に聞き従って、それで癒しを受けたことです。その通りに従ったことはすごいですが、ところが、次からが問題です。

15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かったと、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。17 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。18 この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」

いかがでしょうか、主に癒されたことをそのまま受け取って、感謝して、それで引き返しています。このサマリア人の行動には、先ほどのイエス様の言われた、からし種のほどの信仰が働いています。素直に、受けた恵みに応答しているのです。喜んで、そのまま引き返して感謝しています。彼は、自分がそれが信仰によるものなどと思もしなかったでしょう。からし種のような信仰とイエス様が言われたのです、それだけ自分にさえ気づかないような信仰が、実は神からのものであり、

主人としもべの関係をよく表しています。このサマリア人に、「あなたはよく戻ってきたね。引き返すのは、大変だったことでしょうか？」と尋ねるのは、野暮ですね！そんなの当たり前なのです、彼にとっては。

けれども、当たり前が当たり前ではなかった。他の人たちは、受けた恵みを本当に恵みとして受け取っていませんでした。感謝して、神にしかできないことをしていただいたことに、応答していないのです。これはまるで、数億円する天才画家の絵を、何か数千円の絵画であるであるかのようになすことです。恵みはすでにあるのに、それを恵みとして受け止めていない。恵みが選びによって与えられている人たちほど、実は鈍いのかもしれません。イエス様は、「この外国人のほかにも、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」とされている中に、その逆説が語られています。

3A 人の子の日 20-37

そして、それが次のパリサイ人の質問にもよく表れています。

1B 只中にある神の国 20-21

20 パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。21 『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

「神の国はいつ来るのか」というパリサイ人の言葉は、私たちが考える以上にとても現実味を持ったものとして受け止められていました。イスラエルの国は、ローマ、その前はギリシアによって踏みじられていました。戦争が次々に起こり、ユダヤ人は聖書に書いてあるように、異邦人による支配を終わらせてくださるメシアの働きを待ち望んでいました。メシアが、ユダヤ人を圧迫しているローマを打破して下さり、神の国を打ち立ててくださると思っていたのです。そこで、「神の国はいつ来るのか」と尋ねています。イエス様は、バプテスマのヨハネの宣教と同じように、「悔い改めなさい、神の国が近づいた。」と言われていましたが、「神の国が到来するような兆しが何も見ることができないのだがね。」というものです。

その批判に対してイエス様が答えられました。「目に見える形で来るものではありません。」非常に具体的に、ここにある、あそこにあるという形で目に見える形で来るものではないということです。そもそも、パリサイ人たちが疑いの目で見ているので、見えるものが見えなくなっています。イエスが来られてから、病人を治したり、悪霊を追い出したり、盲人の目を開けたりと、預言者たちが、メシアが行なうと前もって告げていたことを、イエス様は行っておられました。ですから、それでイエスがキリストであることを認められるのに、一定の目に見える徴を要求していたのです。

そこで、イエス様はこう言われます。「神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」ここでしばしば、間違った解釈がなされます。「神の国は心の中にあって、目に見えないものなのだ」ということです。そして、心の中にキリストが来られるのであれば、それで神の国なのだとして、それが目に見えないことなのだとしています。それで、目で見える形で主が戻って来られることに抵抗を感じる人たちがいます。そういった、世界における徴とか求めちゃいけないのに、心の中がイエス様で平安であれば、それが神の国じゃないの？と言います。事実、そういった意味合いで、「神の国が心の中にある」という歌詞の賛美の歌までがあるぐらいです。それは、間違った読み方です、弟子たちに対してははっきりと語られますが、やはり目に見える形で世界に終わりが来ます。

新改訳の翻訳はそういった意味で助かります、「あなたがたのただ中にある」と言われているのです、心の中にあるのではなく、あなたがたの只中にある。つまり、ここでイエス様は、「わたしが、神の国のキリスト、王であり、あなたがたの只中にいるではないか！」と言われているのです。そこに、目に見えるイエスご自身がおられます。この方が王であられ、王がおられるから、そこに神の支配、神の国があるのだということです。神の国とは、正確には「神の王国」と訳すべきものです。王あってこそその国です。ですから、この方が目の前におられて、神の国が、この方による言葉や行いによって表れているのに、彼らはその恵みに応えないでいます。それで、見えるものが見えなくされているのです。

ですから、話の流れはずっと一貫しています。目の前に恵みがあるのに、その恵みを受け入れ、応答さえすれば、つまり感謝をもって受け入れていけば、そのままそこに神の御霊の力が現れます。サマリア人の場合は、そのまま引き返して喜んで、神をあがめて、イエス様にひれ伏しました。パリサイ人たちは目の前にいる方を自分のキリスト、主としてひれ伏せば、そこに目に見えない形ではあるけれども、神の国が広がっている世界を見ることができたであろうに、ということです。

以前、教会で、いろいろ不満を言っている人がいました。他の教会の礼拝にも同時に行くようになりまして。他の牧師さんの助けを借りて、二人でその人の悩み相談に乗りました。その一つが、「あの教会では、傷ついた人が癒されている働きが行われている。この教会にはそれはない。」というものでした。そこでもう一人の牧師さんが行ったのです、「それを、この教会で求めればよいのではないですか？イエス様はここにいらっしゃるのですよ。」そうなんですね、あそこの教会にいけばそれがあるが、ここにはないという考えは、イエス様がここにいらっしゃるという恵みを受け入れていない、信じていない表れにしか過ぎなかったのです。私は、いつも期待しています。主がなさりたい業が、どんな形であれ、御心のままに現れることを。傷ついた人が奇跡的に心から癒しを受け、また時には肉体の癒しもあることでしょう。ともかく、自分にはどうしようもできない問題が、主の栄光が現れる形で解決されることを、ここでも起こることを願っています。けれども、それがたとえ目に見えない形で現れなくても満足しています。なぜなら、イエス様は変わらない方だからです。

2B 人の子の来臨 22-37

そして次に、既にイエス様を主として受け入れている弟子たちには、神の国の到来を、「人の子の日」として語って行かれます。

1C 稲妻の光 22-25

22 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。23 人々は『見よ、あそこだ』とか、『見よ、ここだ』とか言いますが、行ってはいけません。追いかけてもいけません。24 人の子の日、人の子は、稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光ると、ちょうど同じようになります。25 しかし、まず人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければなりません。

イエス様は、ご自身のことを「人の子」と言われています。これは単純に人の子、人間に過ぎないということに使われる場合が多いですが、ダニエル書において、メシアが到来して、世界を支配される時に使われている呼び名になっています。「7:13-14 私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」イエス様は、ここの箇所を引用して、大祭司カヤパの前でご自身がキリストであることを公言し、それでユダヤ人の間で死刑が確定しました。執行をする力はなかったので、ローマの十字架刑に託しました。

「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。」というのは、イエス様が、死んで甦られ、それから昇天されて、神の右の座に着かれるからです。天に留まっておられます。その時までには、キリストによる御国の到来を見ることはないと言われていました。

それから再臨される時ですが、再臨の兆しが近づくにつれて、強い惑わしがあることを語られています。「ここだ、あそこだ」という言葉にありますね。先にパリサイ人たちが求めていることは違うと戒められたようにここでも戒めておられますが、再臨の時は、「稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光ると、ちょうど同じようになります。」ということになります。すべての目が、栄光と力を携えてこられる主を見ることが出来る形で来られるのです(黙示 1:7 等)。そしてイエス様は、まずその前にご自身が苦しめられ、この時代、つまりメシアが到来したこのユダヤ人の世代に、捨てられなければならないという、第一の使命を語られます。

2C ノアとロトの日 26-37

主が苦しめを受けるという第一の使命を果たされた後も、弟子たちにはその後どうなるのか？人の子の到来はどうなるのか？を前もって語っていただきました。

26 ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていましたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。28 また、ロトの日が起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

まず、イエス様ご自分の再臨について語られる時に、ノアの日とロトの日を歴史的事実として語られていると言うことです。水によって、ノアの家族以外が全ての人が死に絶えました。ロトの時は、ソドムとゴモラの町が、ロトと未婚の娘二人以外は全て火によって滅ぼされました。これらは、そのまま起こったこととして語られています。そしてご自身が戻って来られる時もその通りなのだとされるのです。ペテロも第二の手紙 3 章でこのことを強調していて、「3:5-7 こう主張する彼らは、次のことを見落としています。天は大昔からあり、地は神のことばによって、水から出て、水を通して成ったのであり、そのみことばのゆえに、当時の世界は水におおわれて滅びました。しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」当たり前に思われるかもしれませんが、「火による裁きは、愛の神の性質に反する」として、主の火による裁きをそのまま受け入れない解釈があります。けれども、イエス様ご自身がそのことをここにあるように否定されています。

ここで強調されているのは、「突如としての滅び」ということです。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は普通の日常生活を歩んでいました。ロトたちが出ていくまでは、ソドムとゴモラでも、普通の日常生活を歩んでいました。聖書では、神が地上に不義に対して怒りを示す日を、「主の日」と読んでいますが、それは突如としてくることを、パウロもテサロニケ第一で話しています。「Ⅰテサ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

30 人の子が現れる日にも、同じことが起こります。31 その日、屋上にいる人は、家に家財があっても、それを持ち出すために下に降りてはいけません。同じように、畑にいる人も戻ってはいけません。32 ロトの妻のことを思い出しなさい。33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

まるで、津波が襲って来るかのような避難をしなさいとイエス様は命じておられますが、これはマタイ 24 章では、荒らす忌まわしい者が聖なる所に立つのを見た時に、ユダヤ地方に住んでいる人々は一目散に逃げなさいと書かれているからです。

これは、その時のユダヤ人、エルサレムとその周辺にいる人々のことを思ってイエス様は言わ

れていますが、けれども、キリスト者の基本姿勢も同じでなければいけませんね。私たちは、東日本大震災の津波の時にも見ましたが、正常性バイアスというものがあります。ものすごい大変なことが起こっているはずなのに、そういう時だからこそ、むしろいつもと同じことを反復しようとしてしまう、というものです。割れたガラスを掃除してみたりするのですが、津波警報は大音声で外に流れているのです。その時には、けれども、何もかも捨てなければいけません。ここに、ロトの妻のことを思い出ささいとイエス様は言われていますね、ソドムの町にいろいろな思いがあって、それでそれを何とかしなければいけないと思ったのでしょうか、ところがかえってそれが命取りとなって、彼女は塩の柱となってしまいました。ですから、私たちは、主がここで言われているように、「それを失う者はいのちを保ちます」という姿勢が必要です。自分の思いを一新させることをいとわないことです。

34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。35 同じところで臼をひいている女が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。」36（畑に男が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。）

36 節は引照部分の下にあります。ここで取られる人と、残される人のどちらが神の裁きを受けるのか？という議論があります。私は、地上に残されている人なので、ノアの時も、ロトの時も考えると、取られるのが救われる人々で、残されるのが滅ぼされる人々ではないか？という考えと、今、直前で直ぐに逃げなさいとイエス様が命じておられるので、逃げて残された人は救われて、そうでない人は命が取られる、という意味合いかもしれません。後者、つまり残された人々が救われると考えると、大患難の終わりに、人の子が来られるのを見て、自分の罪を嘆き悲しみ、それでイエス様が彼らを敵の手から救われるということの意味するでしょう。同じユダヤ人でも、まともに警告の言葉を聞いて、生き残る人もいれば、神をなおがしろにして言うことを聞かないで滅んでしまう人に別れます。

前者であれば、携挙のことでしょう。どのように取られるのか？それが、昨日、終末に生きるカンファレンスで見に行きましたが、教会が地上から空中に、そして天にまで引き上げられる携挙によってではないかと思われまます。テサロニケ第一 4 章で、教会が天に引き上げられることが書いてあって、その直後に、先ほど読んだ主の日、突如としての滅びが書かれているからです。そして 5 章 9 節にこう書かれています。「神は、私たちに御怒りを受けるようではなく、主イエス・キリストによる救いを得るよう定めてくださったからです。」とあります。

ここから私たちは、いつも生活を共にしている人々が、イエスによって救われているかそうでないかで、神の裁きの日には真っ二つに分かれるのだと言うことが分かります。しかも、日常生活を歩んでいる中で、突如として起こります。滅びから救われる人と、そうでない人にははっきりと別れるのです。ですから、私たちは健全な恐れをもって日々を生きていきたいですね。

37 弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言うと、イエスは彼らに言われた。「死体のあるところ、そこには秃鷹が集まります。」

これは、ハルマゲドンの戦いにて、イエス様が世界中の軍隊がイエス様に挑みかかって戦ってくるので、主が彼らを口から出る剣をもってことごとく滅びされて、死体となって積み上がっているところを、猛禽が食べる場面です。これも、神の裁きがかなり厳しいことを示しています。黙示録 19 章には、その場面が「神の大宴会」と記しています。「黙 19:17-18 また私は、一人の御使いが太陽の中に立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛んでいるすべての鳥たちに言った。「さあ、神の大宴会に集まれ。たちの肉、千人隊長の肉、力ある者たちの肉、馬とそれに乗っている者たちの肉、すべての自由人と奴隷たち、また小さい者や大きい者たちの肉を食べよ。」

イエス様は、躓かせる者が礮臼にゆわえられて、海に投げ込まれるというところを語られ、最後は死体が秃鷹についばまれるという凄惨な光景ですが、そういった裁きに終わります。私たちが、その中で神によって与えられた恵みに応答しているのであれば、そういった裁きとは無縁になれるのです。